

三鷹市山本有三記念館館報

Yuzo Yamamoto Memorial Museum Report

号
14年3月
2016

三鷹市山本有三記念館企画展

有三文庫の思い出

子どもたちに本を

2016年3月12日〔土〕→9月4日〔日〕

都立「有三青少年文庫」の門

今年、山本有三記念館は開館20周年を迎えます。旧有三邸が東京都立教育研究所三鷹分室「有三青少年文庫」となり、三鷹市への移管を経て、1996（平成8）年に記念館として開館しました。時代によって姿を変えながらも、有三が灯した「子どもたちに本を」という小さな光は、建物と共に今まで受け継がれてきました。本展は有三邸から記念館に至る歩みを辿りつつ、子どもたちと本を結びつけたこの建物の歴史を振り返ろうとするものです。

1936（昭和11）年、作家・山本有三〔1887-1974〕は、井の頭公園のほど近く、玉川上水のほとりに佇む大正末期建築の洋館を購入し、吉祥寺から三鷹に移り住みました。「眞実一路」の新聞連載を抱え、執筆に適した静かな環

境を求めていた有三にとって、水と緑に囲まれた三鷹の家は願つてもない住まいでした。

戦中に本を読むことが困難な時代になると、有三は邸内に「ミタカ少国民文庫」を開き、蔵書を近隣の子どもたちに開放しました。（ミッドウェーの敗戦後、戦局が悪化していく中にあって、子どもたちに本を届けたこの小さな家庭文庫は、当時の子どもたちにとってどれほど嬉しく、大きな存在だったことでしょう。1944（昭和19）年2月、子どもたちの安全を考えて文庫を閉じた有三は、蔵書約2000冊を三鷹市と郷里栃木市の小学校に寄贈。4月には自らも

長女と次女を連れ、栃木市に疎開しました。「ミタカ少国民文庫」が開かれ

ていたのはわずか1年半ほどと、決して長くはありません。

しかし現在の山本有三記念館に至る道筋の始まりに位置付けられる、重要な出来事だったといえるでしょう。

有三は戦後、青少年の育成に

役立てほしいと三鷹の土地と建物を東京都に寄贈し、1957（昭和32）年に東京都立教育研究所三鷹分室「有三青少年文庫」が開館しました。設備の整った子ども図書館として活動を続けていましたが、1985（昭和60）年に三鷹市に移管。文庫としての従来の機能に加え、有三の業績についての随筆を掲載しています。

高橋健二〔1902-1998〕ドイツ文學者。東京帝大獨文科卒業。成蹊高校を経て中央大学教授を務めた。有三が編纂した『日本少国民文庫』では吉野源三郎、石井桃子、吉田甲子太郎と共に編集実務を担い、自らも「点子ちゃんアントン」や「蜜蜂マーヤの冒險」を初訳しました。

次第に市立図書館へと名称が変わり20年が経った今でも、これを「有三文庫」と呼ぶ人がいます。子どもの頃に文庫でよく本を読みましたという方、自らが親となってから子どもを連れて來ていたという方、静かな閲覧室が受験勉強をするのにとても助かったという方…。それぞれの方が利用していた時代も、立場も、この建物に期待する役割も様々です。かしい思い出と親しみとが込められているのではないでしょか。



が、「有三文庫」という言葉には、懐物に期待する役割も様々です。時代も、立場も、この建物が受験勉強をするのにとても助かったという方…。それぞれの方が利用していた時代も、立場も、この建物に期待する役割も様々です。

開館20周年という節目にあたり、有三が暮らした頃と変わらずに佇むこの洋館で、子どもと本のつながりに思いを馳せる機会になれば幸いです。

渡辺 美知代（学芸員）

有三青少年文庫の前身 高橋 健二

(元中央大学名誉教授・故人)

「路傍の石」の作者は戦時下三鷹邸内に子どものための小さな読書室をひらいた

1 まえがき

有三青少年文庫が開館式を行なったのは昭和32年12月20日であるが、その前身ともいべきミタカ少国民文庫はそれより15年もまえに開かれたのである。今日のは公的な機関であるのに対し、ミタカ少国民文庫は私的なささやかなものであつた。しかし、子どもに本を読む喜びを味わせたいといふ山本さんの親身な願いが、ミタカ少国民文庫という自発的な形をとつて発足し、やがてそれが東京都立教育研究所有三青少年文庫に発展するようになつたのである。ミタカ少国民文庫は、今日の文庫の母体であり、始めた人の気もちを直接呼吸していたので、それを思い起してみると、有三青少年文庫の本来の主旨をあきらかにする上に、なにほんとか役だつかもしれない。

形がととのい、規模が大きくなつた段階でその初めをたずね、本来の面目を想起することは、どんな仕事においても必要なことであろう。

ちは、東京都立の機関になつた今日でも、変わつていないのである。根本にあるのは、子どもに対する山本さんの愛情である。そして山本さんが子どもから本好きでありやがては本を書く人になつたから文庫という形で、子どもへの愛情が具体化されたわけである。

それがまた決して突然ミタカ少国民文庫という形をとつたのではない。子どもへの愛情と少国民の教育への関心が、自分のお子さんの成長と共に具体的に発展して行つた。少年時代の自分の読書への渴えと同様、自分の子ども教育というなまな体験が、文庫への歩みを推進して行つたのである。

だから、ミタカ文庫以前を少し振り返つてみなければならない。

山本有三は男性的な劇作家として認められた。いわば硬派に属する。しかし、愛らしい子どものほほえましい情景も早くから書いている。小品「兄弟」(大正11年)はその最初のもので、強い性格の有三がこんなやさしい作品を書くのかと、意外な感嘆を誘われた人も少なくなかつた。翌年の「ウミヒコ ヤマヒコ」は、子どもの世界とは限どされないが、

ムードや心理には子どもの感じがゆたかで、児童文学全集などにはよく収められている。長編小説を書くようになつてからは、その多くが成長小説であるため、「生きとし生けるもの」から、「路傍の石」にいたるまで「風」をのぞいて、みな子どもの場面から始まつてゐるが、子どもが重要な役を占めてゐるがする。できてしまつたおとな世界よりできつつある子どもの世界により強い関心を有三が示しだしたことは、作品にまぎれもなくあらわれている。やがて、人間をつくることが何よりたいせつだということを、有三は強調するようになつたが、それは作品を通してしだいにはつきりと自覚されるようになつたのである。

自分がそうであったから、今の子どもにできるだけ本に接する機会をつくつてやりたいと思わずにいられなかつた。それがミタカ少国民文庫の開かれた動機であった。その気もみたくなつたであろう。

2 前 史

ミタカ少国民文庫がつましまく開かれたのは、太平洋戦争の最中、昭和17年7月27日、山本さんの、55歳の誕生日であった。「路傍の石」の吾一のよう、山本さんは少年のころむしように本を読みたがつたがなかなか思うように読めなかつた。貧しくて本が買えないというわけではなかつたが、明治30年前後のころは、栃木町では少年向きの本はそう自由に手にはいらなかつたであろう。そうであれば、いよいよ本が読みたくなつたであろう。

自分がそうであったから、今の子どもにできるだけ本に接する機会をつくつてやりたいと思わずにいられなかつた。それがミタカ少国民文庫の開かれた動機であった。その気も

そういうふうに下地ができていたところへ、吉田甲子太郎、吉野源三郎、石井桃子というようなすぐれたスタッフが山本さんを中心を集めるようにになつたので、少年少女のためによい読み物を作ろうという案が、しだいに熟して行つた。それが「日本少国民文庫」16巻として昭和10年11月から刊行された。第1回回刊本は「心に太陽を持て」というふうがわりな書名であった。実は「心を打つ話」という題にしていたのだが、刊行の少しまえに朝日新聞の編集局長をしていた鈴木文史朗が同じ題の随筆集を出したので、同じ名の本を出すわけにいかなくなつた。たまたま、私がNHKのドイツ語

もつとも、長編小説を書きはじめるまえ、大正15年1月、文芸春秋に「小学読本と童話読本」という熱のこもつた評論を書いている。国定の「小学読本」が灰色で子どもにとつて魅力のないことを鋭く指摘し、菊池寛編集の「童話読本」が子どもの心を引きつけるようにできているのを推賞している。これは有三が児童出版に关心を示した最初である。長男有一君がようやく本に興味を持ちはじめたころなので、父親として切実に感じたことにもとづいている。そこに主張されている点の多くが今日実現されているのを見ると先見の明があつたといわざるを得ない。子どもによい本をの願いは、この時すでに深く根ざしたといえよう。が、そのころは創作にあぶらのうつていた時期であつたから、児童図書について具体的な動きをする余地はなかつた。

しかし、有一君が成長するにつれ、また女のお子さんたちが統いて大きくなつてくるにつれ、子どもの教育への関心はおのずと強まつたにちがいない。昭和7年に明治大学の文芸科初代科長を、ためらいながらも引き受けたのは次の世代の教育の重要さを考えたからである。その翌年「女の一生」の初版の印税全部を文芸科学生の育英資金として明大に寄付したのも同じ気もちのあらわれである。また学生のための図書を選定購入するためにも、熱意をもつて物心両面の犠牲を惜しまなかつた。これは大学生のためであつたが、若いものへの愛情と、本に親しませようという熱意の点では、子どもを対象とする場合と異なるところはない。

講座で、フライシュレンの「心に太陽を持て」という詩を放送して、反響があつたので、急に「心に太陽を持て」という題にしようと、山本さんがいいだしたのである。この少国民文庫が児童出版として比類なく大きな役割をはたしたことは、広く定評のあるところである。この文庫にそいだ山本さんの熱意と配慮とはみなみならぬものがあつた。編集に協力していたものがみんな音をあげたくらいである。

この編集をしているうちに、山本さんは国語の表記のしかたをやさしくしなければいけないことを痛感した。その一端が、昭和13年、「戦争とふたりの婦人」のあとがきにつけられたふりがな廃止論となつた。これは大きな反響をよんだ。批判もあつたが、大勢としては、ふりがな廃止の方向を進んできた。当時はもとより大戦後もしばらくは、新聞にはべつたルビがついていた。それが当用漢字の普及によって新聞はその他の印刷物の普及が広くなつたか、測り知れないであろう。当用漢字や新仮名づかいが、山本さんの推進によつて実施されるようになつたのは、戦後であるが、山本さんはすでに戦前からその方向をめざしていた。それも、子どもの教育と深く結びついたことである。

戦争がきびしくなるにつれ、子どもの心の荒廃を憂えた山本さんは、日本少国民文化協会を熱心に推進させ、昭和17年その結成にこぎつけ、発会式でいさつし、飛行機を作ることとは緊要だが、人間をつくることこそ、いつさいの根本だという主旨を強調した。

そういう組織活動をしたが、組織をつくれば、そこでやるだろう、とあなたまかせには考へなかつた。山本さんは山本さんで、少国民文化運動を実践した。それがミタカ少国民文庫となつたのである。まわりくどいことを書きつらねて来たようであるが、すべて関連を持つてゐることである。そこに貫した山本さんの念願があることを想起しておきたかつたのである。

4 ミタカ少国民文庫

さきに述べたように、本に恵まれなかつた自分の少年時代のことを思い、今まで戦争で本が乏しくなり始めた現状を

見て、せめて手近な子どもたちに本を提供したいと考え太

平洋戦争2年めにミタカ少国民文庫を開いた。

その前年、山本さんは母を失つた。少年のころ、呉服屋に奉公に出された山本さんが、進学の念やみがたく、うちにもどつて來た時その願いをかなえるため力になつてくれた母であつた。今は、山本さん自身が若いもののことを考えてやる立ち場になつてゐた。文庫開設は母を記念する意味もあつたろう。

同時に、山本さんはかねがね自分が作家として名をなすことができたのは、多くの人のおかげ、広くいえば社会のおかげである、社会から受けたものを社会に還元したい、と考えていた。ミタカ少国民文庫を開いたのも、邸宅を東京都に寄付したのも、社会への還元のあらわれである。山本さんは、ゴルフをするでなし、別荘を持つでなし、車さえ持たない。唯一の最大の楽しみは蔵書と読書であろう。読書の喜びを子どもにわかつ氣もちで、建物と本を寄付したのである。

昭和17年の6月30日、明大図書館の奥村敬嗣氏が桐越千代子を伴つて、山本邸を訪れた。それから桐越さんが、山本さんのところにある児童図書を分類しラベルをはつた。寄贈された図書が広い家にたくさんまつていた。日本少国民文庫の編集用もあつたし、4人のお子さんが児童図書から離れる年齢に達したものになつた本もあつた。したがつて相当の本があつたが、必要なものはある程度買いたした。

邸宅は、今日の有三青少年文庫になつているとおり、広いから、20名くらいの子どもを応接間に入れることは容易であつた。一ぱんいいへやが、子どもに開放されたわけである。閲覧者は、門から「路傍の石」のある裏庭にまわつて、庭むきの入口からはいることにした。

書だなをぶやし、大きなテーブルをすえ、いすを20あまり入れた。そのころはもう物資がなくなつてゐたので、いすを買うことともかんたんではなかつた。本の整理や読書の相談あいには、しばらくのあいだ桐越千代子さんがあつたが、結婚されてからは、明大文芸科出身の瀬川君が引きついだ。

開館に先だって、山本さんの所属していた隣組に回覧板をまわし、10歳から16歳までの子どもに、土曜と日曜との午後、自由に読書するよう、案内した。7月27日の開館日には

11名の子どもが来た。

そのころは、ミッドウェー敗戦後だんだん暗いニュースを聞くことが多くなつてゐたので、少国民文庫開館は数すくな明るい話題として、新聞や雑誌がこぞつて取り上げた。そのため、広く知れわたり、ずいぶん遠くから来る子どもがあつて、いつも満員という盛況であつた。庭が広いので、本に立つて来ただけで、立ち場になつていた。文庫開設は母を記念することができた。

18年の1月3日には、常連の子どもとそのおかあさんたちを招いて、童話を聞く会をした。その冬はよほどあたたかかつたとみえ、食堂の外の大理石張りのテラスに演壇を設け庭にむしろをしいて座席とした。少し寒かつたけれど、多ぜいの人が屋外のつどいを楽しんだ。

山本さんはじめ、吉田甲子太郎君たちのあいさつがあつたのち、久留島武彦さんが童話を実演した。それが、めっぽうおもしろかつた。おとなも、手ばなしでおもしろがり、久留島さんの話術のたくみさに舌をまいた。まさに楽しい午後で、万歳三唱の音頭をとつた私にも忘れがたい思い出である。

しかし、戦局はしだいに悪化していった。子どもを集めるため、久留島はしるかた。おとなも、手ばなしでおもしろがり、久留島さんの話術のたくみさに舌をまいた。まことに楽しい午後で、万歳三唱の音頭をとつた私にも忘れがたい思い出である。

国民党は、19年の秋そこが米軍の第1回の空襲の目標になつた。そんなわけで、19年の2月、ミタカ少国民文庫は閉鎖を余儀なくされた。その児童図書約二千冊は、三鷹市と柄木市との小学校に寄付された。4月には山本さん一家も柄木市に疎開した。

一年半ほどの短い寿命で、ミタカ少国民文庫は閉じられた。しかし、山本さんの志は敗戦という悲運にもめげず、今日のようない形でよみがえつた。小さな文庫ではあるが、それなりに歴史を持つてゐる。ひたむきに生きた作家の切なる願いが、消えそうになりながら、燃えつづけることになつた。この人は、還元したいと願つたものを公共に還元した。この人が期待をかける子どもたちのために、その願いを生かすかどうかは、私たちにかかる。彼はなすべきことをなした。

今は、われわれがなすべきことをなさなければならぬ。

(1970・3・29)

* 転載にあつては、初出「月刊 教育じっぽう」昭和45年5月号を底本とし、明らかな誤植と思われる箇所は訂正しました。

ガイドボランティアリポート 14

記念館で活動中のガイドボランティアより交代でリポートをお届けします

巡り合わせ

小学校3年生か4年生の頃教室で担任の先生が回す映写機で「路傍の石」を見ました。吾一が鉄橋にぶら下がるシーンをよく覚えています。学生の頃には近所の子供が「有三文庫に行ってきた」と言うのをよく聞いていましたが、私自身がこの洋館に足を踏み入れたことはありませんでした。

あれから数十年、「路傍の石」が執筆された記念館で、有三の作品に触れ、幅広い活躍と業績について学び、建物の来歴を知り、来館されるみなさんの案内をしていると何か不思議な巡り合わせを感じます。

(磯貝 茂次郎)

出会い

ボランティアをして、本当に楽しい事は“出会い”です。人との出会いはもちろんですが、知らないことへ出会う喜びも大きいです。企画展が変わる度、ガイダンスを受け、山本先生の生涯を違った視点で見てみると、新しい姿が浮かび上がります。最近は、山本先生の優れた問題解決能力に感激しています。文化財保護法、著作権法など先生の優れた言語力を用いて、根気強い折衝の後、法制化に成功する経緯など本当に興味深いです。そうした感激を拙いですが、自分の言葉で観覧者の方にお伝えしたいと思います。

(小池 さゆり)

▶▶▶事業報告

8月 夏休み子どもワークショップ
有三著『心に太陽を持て』の文庫本をハードカバーに作りかえる製本体験(講師:上島明子さん)と、謎解きをしながら記念館を見学する建物探検の2本立て。来夏の企画もお楽しみに!

10月 秋のテラスのおはなし会
「絵本」を通して人と人とのコミュニケーションを楽しむ「三鷹駅前まるごと絵本市」に初めて参加し、記念館のテラスでおはなし会を開きました。暖かな陽ざしの中、子どもたちの楽しそうな声がにぎやかでした。

11月 秋の朗読会
朗読会初出演となる大滝寛さん(文学座)をお招きし、戯曲「女おや」を全編一人語りでお届けしました。9人の登場人物を、声だけで巧みに演じ分けた熱演は圧巻でした。

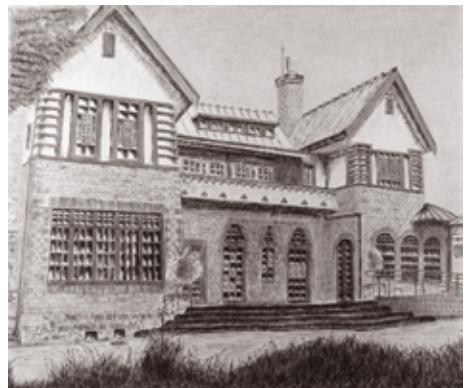


朗読:大滝寛(文学座)

第3回 山本有三記念館 スケッチコンテスト 入賞作品



市民賞
「初秋夕暮れ」 三輪修一



山本有三記念館賞
「蒼空に映える」 石井賢国



審査員賞
「夕日をあびる山本有三記念館」 澤田桃佳



編集・発行

三鷹市山本有三記念館

〒181-0013 東京都三鷹市下連雀 2-12-27
TEL 0422-42-6233 FAX 0422-41-9827
ホームページ <http://mitaka.jpn.org/yuzu/>

開館時間：午前9時30分～午後5時

休館日：月曜日及び年末年始(12月29日～1月4日)

*月曜日が祝日の場合は開館し、翌日と翌々日を休館。

入館料：300円(20名以上の団体 200円)

*中学生以下、障害者手帳持参の方とその介助者、校外学習の高校生以下と引率教諭は無料。

アクセス：JR中央線「三鷹駅」南口より徒歩12分

JR中央線・京王井の頭線「吉祥寺駅」南口(公園口)より徒歩20分